

9—いざ帰りなん

(1) 家庭に勝るホームなし

「病のごとく思郷のころ」に明け暮れているのがホームに暮らす老人たちである。帰るすべを全く奪われている老人にとって、それは病そのものとして自分を苦しめている想いである。

だから、任運荘ではせめて一年のうち節目に当たる盆と正月だけでも、わが家に帰れるようにすることを重要な任務と考えた。開所して三カ月もたたないうちに第一回めのお盆を迎える。早速、老人の帰省運動を家族に伝えると、予想以上の家族の拒否と困惑に驚かねばならなかった。

家族の狼狽うろばいも分らないことはない。わが老親を無理やりにホームに送りつけるのに成功して、ホッとしたばかりであるから。「一番忙がしい時に」とか、「困ったから預けたのに」とか、夫婦喧嘩になって顔をひっかかれた傷を示しながら断りをいう息子など、親の一時帰省をめぐる家庭混乱が展開されたらしい。老人がそのまま居ついてしまいはしないか、それを一番恐れた。



しかし、老人の心になれば、家族への説得は憤りを抑えながら辛抱強くすすめられ、第一回めは十七名までこぎつけることができた。老人の帰省は適当でないとする不平不満を訴える投書が関係機関にもよせられる程であったが、特養にとってこの事業は重要なことと信じていたから、そのことを公表して推進した。

半年もしないうちに二回めに当たる年末帰省を迎える。西日本新聞(50・12・30)は「預け放し返上」という見出しの下に、「家庭に勝るホームなし」として、この運動を意義づけた。

「二十八日の朝、任運荘の広間は老人たちの笑い声が響いた。『あすは家に帰れる』、孫の顔が見られる。——老人ホームが預け放しのうば捨て山になっているとき、同ホームの里帰り運動が突っつて、二十三人の老人が正月を家族と過ごせるようになったのだ。お盆の時にテストしてみたら家族との交流が生まれて、めでたく退園した老人もいるが、家庭にまさるホームなしを地で行く同園の里帰り運動を、今各地の老人ホームが注目している。

任運荘は五月に開所、施設と家庭はつながっていなければならないという考えから、八月の盆休みに十八人の老人を帰宅させてみた。うち、二、三人は居心地が悪かったのか早めに戻ってきたがほとんどは満足してホームに帰り、一人は里心ついたのか、これがきっかけになって家庭へＵターン。こうして、里帰り運動は老人に家庭復帰への希望を持たせるきっかけになる、との確信を持った。

その成果は十二月の里帰り希望者の数に現れた。お盆に帰宅した十七人に六人が加わり二十三人がわが家や親類の家で正月を迎えることになった。同荘事務長は、里帰り運動を始めた時は、その間の措置費をどうするか、正月に職員を楽させるためだろうなどの批判も出た。しかし、老人の生活を開放的なものにし、家庭復帰の希望を持たせるのが唯一の目的です」といつている。

この報道をきっかけに、施設間で今までひそかに行われていたらしい帰省も公然化され出した。それだけ老人の心は充たされていくことになる。

帰省による思いがけない出来事も起こる。骨折、褥瘡、風邪、下痢が持ちこまれる。「やはりホームがいい」という者もいる。ある老人は「折角帰ったのに皆の前に出してもらえず、ずっと納戸に横になったまま」と怒る。しかし、多くの老人の表情は明るさを増し、帰省した日からもう次の帰省日を待ち望んでいる。

帰省も回を重ねるにつれ、ほぼ家族の方にも定着し、連絡もしないのに何日から何日までと申し出るようになっていくが、連絡がないのをいいことにして忘れたふりをする者も少なくない。しかし、他のホームに比べると、ほぼ半数を越える帰省者の数は多いとしなければならぬ。

五十四年正月帰省の状況は次の通りである。帰省した者二十五人。そのうち利用者も家族も当然として受けとっているのが二十二名。残りの三名は家族でない身元引受人が当然の勤めとして認められたものである。家族でも頑として受け入れない者がいるのに比べると、頭が下がる。帰省期間は長

表9 年度別盆正月
帰省者数

年度	帰省できた人	
	正月	盆
50	—	16
54	25	28
55	26	32
60	35	37
61	36	40
62	34	—

くて十四日、短かいのは半日、平均六日間である。

正月は寒くて帰れないが温かくなって帰る(二名)とか家に病人が出て帰れず、家族の方から正月料理を持参して正月を共に迎えた(二名)のを除いて、残りの二十二名(五一名中)が帰省のかなわない悲しい組である。

二十二名のうち、「帰りたくても家がない」は十一名。

これは致し方ない。「帰りたいが身元引受人の都合でため」は五名。これも無理するわけにいかない。問題は「本人は希望しているのに家族がいうことを聞かない」のが六名もいることである。この悲運を嘆かす原因のほとんどは嫁の非情さにある。

(2) 心狂うがごとく

五十五年の正月は五周年に当たり、帰省も十回めになるので、当然老人の帰省を受け入れる状況にある家庭には強力に説得する方針をとった。反対する八家族を説得したが、四家族しか成功しなかった。二十六名の帰省に終った。

Aさん(七七)は独り暮らしの夫のことばかりを考える日々であるが、年の暮れともなれば思いは募るばかりである。

夫は妻の世話が重荷になるらしく、何度もホームに来てはAさんを説得し、帰省を諦めさせる。しかし、夫が帰えると、狂ったように「帰りたい」と叫び、ついに自分の汚物をおむつからつかみ出して投げつけるようになってしまう。

ふだんの彼女は二人余りの赤ん坊を助産したことをたんたんと語るしっかり者である。余りの変りように、放置できなくなり、実の娘に連絡する。ついに娘たちが迎えに来るようになった。一泊して帰荘したAさんは、迎えの寮母に大声で「ありがとう」をくり返す。もうAさんはいつもの彼女に帰っていた。勿論、汚物のつかみ出しもない。

辛抱強いBさん(八四)は今まで一度も帰りたいといったことがない。今年「嫁の許しがあれば、正月に帰って息子の仕事ぶりを見たい」と希望を明らかにした。「嫁の許し」―何と悲しい言葉ではないか。まぢがいなく、ホームは老人の家での座を消し去ってしまう役を果たしている。病母の希望を家に知らせると、早速ホームにかけつけた嫁は血相を変えている。「おばあちゃん、帰って風邪でもひくと、悪くいわれるのは私なんだ」と強く反対されると、Bさんは弱々しく肯くだけである。

「死んで帰るわエー」とつぶやくBさんの姿に生氣は見られない。私たちは再び帰宅受入れを要求する。現れた当の嫁は喧嘩腰である。「私は責任がもてません。折角ばあちゃんは納得していたのに」と露骨である。はっきりいわねばならない。「正月帰省は任運荘の強い方針です。今まで帰りたいといわなかったのに、こんどはよくよくのことです。医者も許可している。家で病気が再発

すれば、嫁として世話して下さい。お嫁さんに世話されて死にたいといっているんですよ。

表面をとりつくりやうやり方は、もうここでははしておれない。双方いつくすと、ふしぎと相通うものが生まれてくるらしい。こちらも一段高い所からいっている自分を反省するからだろう。彼女も心を開いたらしい。「じつのところ、ホームに預けて気楽になっているところへ、帰省となると気が重い」とぶちまける。そうなるを受け入れ成功である。

私たちが、まず、仕事の進め方に確信をもって当たることが大切である。

「寮母が楽をしたいためか」「風邪をひいても責任はもたない」などと聞き入れようとしないう族、その反対をおし切ったの帰省でも、効果は著しい。精神的に落ちつき、明るさを増すが、身体も目にみえて元気になる。不服顔の家族も僅かの滞在で義務を果たしたつもりであろう、「連れて帰ってよかった」と言葉をそえてくれる。

帰省できない二十四名のために、その近況を書き、面会やせめて電話を待っていることをいい添えて通信する。丁度その半分が「家」のある人と「ない」人とに分けられ、「面会」のあった人は二十四人中十八名、六名は面会人さえなかった。

帰省もかなわず、面会人もない正月は老人たちを狂わせてしまう。私たちが一章冒頭に小学生のショッピングな文章を引用したのはあながちこじつけではなかった。「老人ホームに入れている家族の人が憎い」。

入所させて一度も家に迎えようとならない家族を持つ不運に泣く老人が四名いる。Cさん(六九)は病院から一直線のホーム入りだったため、一度家に帰りたいという思いは強い。電話を再三しては妻に訴える。「年とりも来ん、正月も来ん」早く迎えに来てくれと救助の声であるが、老妻はひとりでは世話できんとにべもない。心は深く傷つけられた。正月に子供達が面会に来たが、笑顔はなかった。それから風邪が二十日めに昇天した。

すべてを諦めている人にとっての面会はまた格別である。養護ホームから移り来たEさん(八七)は「帰りたいが、箸の先ぐらいの遠い親戚に迷惑もかけられんし」といつていたが、面会人があった。前のホームの寮母さんである。見違えるほどに元気になっているのに驚くが、それ以上に喜んだのがEさんで、寮母をつかまえて「これがわたしの正月ですよ」と話す。

Fさん(八〇)は内縁の夫が死んでもう三年にもなるが、まだそれが信じられない。「迎えに来んばい」と狂ったようにわめく。そのFさんに福祉事務所の職員が訪ずれた。「うれしか」と手放しで泣きじゃくる。「こんどはヘルパーさんに来てもらうからね」といわれると、大きくうなずき、「頼みますバイ」と手を出して約束を確かめる。

だから、帰省のかなわな人たちのための正月の行事は、とくに神経をつかう。まず食事に心を配らねばならない。残してもかまわない、豊かに盛りつけよう。朝食は雑煮に黒豆と数の子、紅白なます。某ホームの正月の朝食にパンだけとあったが、手抜き、心抜きの最たるものである。

昼食は鯛の塩焼き、柿なます、紅白かまぼこ、ロースハム、ごまめと煮豆、ほうれん草ひたし、厚焼き卵、吸物、牛乳かん、うざぎりんゴと苺。夜は巻ずし、さしみ、大福豆、数の子、金柑の甘露煮、こぶまき、菊米かぶ、花卵、煮付、みかん。夜のおやつは黄味かんてん。一人約二千二百円。昨夜、寮母室へ入って、「さあ殺せ、早よ殺せ」とわめいたGさんも「ごっとうじゃな」と夢中で箸を動かす。

全員互礼会には動けない人でもストレッチャーで参加させ、せめて、ホームへの所属意識を高めねばならない。「帰れなかった私たちは静かに正月を迎えよう」という挨拶にさえ、涙ぐむ老人がいる。当然、職員も全員出席。職員の舞と謡の慰安などで、家庭以上のことはしなければならぬ。正月獅子舞いもホームの中に招じ入れられる。世間並みの賑いがここにもある。

(3) 家にもホームにも居たい

帰省したお年寄りにはぼつぼつ帰荘する。すべての者が満ち足りた表情をしている。家がよいことばかりであれば、帰荘する足取りはさぞかし重いことだろう。

しかし、「やっぱりホームがええ」と老人たちはいう。その言葉に偽りがあるはずはない。老人の立ち居に不便な住居、もはや場違いのような感じもする老人の座。雀の子のようにただ口をあけて、親鳥の運んでくる餌を待てばよいホームの日々。その上小遣いに不自由はなく、お金は溜る一

方。家に居て窮屈な思いをしなくてもすむ。

それよりも、同じ境遇の老人たちが織りなす集団生活は、想像していたよりずっと居心地がよい。お互いが励ましあう相互教育は何かしら生きがいをかきたててくれる。快適な入浴、肉親よりも手なれた頻繁なおむつ換え、こう考えてくると、家庭よりずっと完璧に近いではないか。

私たちもこの老人ホームを家庭の悪しき代替物とは考えたくない。ホームの存在理由として家庭介護にまさる専門的介護があることを主張したいと思う。病人にとって病院があるように、老衰した者にとって特養ホームが存在する。濃厚な介護を必要とする老人にとっては、治療の場としての病院よりも、特養こそよりよき生活の場として存在すべきではないだろうか。特養が自らの専門性を發揮しているとすれば、特養は決して病院の悪しき代替物ではない。——この理論を、私たちは「やっぱりホームがええ」という老人の言葉から引き出しているのだが、それはドグマにすぎないだろうか。任運荘内だけでいえる偶然的なことにはすぎないだろうか。

ここで、任運荘内での家庭復帰をめぐる実態をみてみよう。

特養が老人を入れ放しにする場でないことはタテマエとしては当然であるが、これまで、私たちは老人の自立が家庭復帰につながるべきであるという立場を強くはとらなかつた。

だから、開所以来現在まで満五年であるが、利用者延べ百六名中、退所者は十七名にすぎず、十七名中家庭復帰は三名、軽費ホームへ一名、成功した者は計四名のみである。

ついでに、十七名から四名を除いた十三名の内訳を記しておく、本人の機能が回復したのではないが、家族や妻を恋いしがるので、家族を説得して帰宅できたのが四名。伝染病等のため入院して退所した者五名。他の特養への転出二名。他の特養へ転出そして再入所一名、家庭復帰後また再入所一名。

いかに家庭復帰がホームの目標にもならず、また家庭自身も家庭復帰に協力的でなかったかが明らかとなろう。

その証拠に、私たちが家庭復帰に重点をおいて努力し始めた現在では、すでに見たように二割を超す十一名の復帰可能者がいるのである（一章四節参照）。

正確を期すためにその内訳を記すと、養護老人ホームへ転居が適当は五名、そのうち三名は家族はあるが、「養子が反対、娘は介護可能」一名、「長男が老親拒絶」が一名、「娘夫婦は受入可能だが老人本人が拒否」一名。ほかの二名は帰る家がない。

残り六名のうち、一名は家族との調整進行中だったが、ついに本年（五十五年）八月家庭復帰に成功する。それも本人は帰宅拒否であるのを家族が引きとったのである。五名は家族すべて介護可能の状況であるのに拒否し続け、本人も帰宅を希望しない。

私たちの家族に対する働きかけに対して、「考えさせてほしい」という者から、絶対拒否という者まであるが、これは予想されたことで今更驚くことはない。

問題は老人たち全員が家庭復帰を承知しないことである。入所に際しての「利用者へのお願い」いわば入所規定を持ち出して、その冒頭に述べる「からだの不自由や家族との関係などを少しずつ直して、家庭に帰れるようにすることを第一の目標にしましょう」という言葉などで説得しても、効きめはない。

「ホームに居て、時々家に帰ったりするのがよい」と老人たちはいう。盆正月の帰省運動はこうした形でもその効果を見せている。必ずしも任運荘がよいというのではなく、もはや、家が安住平安と信じきれなくなったというのが真相であろう。

親を再び迎え入れるのを重荷とする家族の雰囲気。帰宅すれば身心の障害が再発しそうな不便な環境状態。再入所となった時はすでに満員で入れないであろう不安。それらは年寄りの身になってみれば当然の心配である。しかも、人間老年に至れば誰でも「永住の場」を定めねばならない。任運荘をその最後の場所と思ひ定めたことには、最大の尊重を払わねばならない。

しかし、老人たちの心は揺れ動いて止まない。「ホームにも家にも居たい。往ったり来たりしたい」という。もう冷やかな空気が漂う家庭でもホームよりはよいのか、世話がいき届きはするが他人だけのホームをガマンするか。なかなか判断がつかない。

夫婦で入所して四年後夫に先立たれたAさんもその例だ。娘婿までもが、「母を世話してもよい。前は妻の親など世話する義理はないと思っていたが、自分が年よると姑のこともわがことに思われってきたから」という。しかし、「嫁にやった娘にかかる」と娘の肩身がせまい」と、決断がどうして

もつかない。

Bさんの場合はさらに複雑で深刻だ。

娘夫婦につきそわれて入所した時は、一カ月も泣き続け食欲もなかった。しかし、やがてよくなり、トイレも入浴も自力でできるようになり、他人の世話もしている。訪ねる老夫もベッドに横になりながら、「もう帰ろうじゃねえか」と話しあっている。

家族に引きとりをすすめると、「ばあちゃんは帰らんといえます」とにべもなく断わる。そして、娘はその母にわめいている。「あんたが何でもするき、帰れといわれるんじゃ。悪りいといって寝ちよればいいんじゃ。家に帰れば食いもんもいるし、金ももらわれんのんで」。実の娘でもこんな有様では帰りようがない。

こうした粗雑な言葉を病親に浴びせかける態度に出ようが、もっともしやかな理由を申し立てる形をとろうが、重荷であった老親を再び引きとるとなると、家族としても絶大な決心をしなければならぬ。

そうせしめてまで、その家は帰るに値するものかどうか、私たちだけでなく、当の老人こそ困惑したまま立ちつくしている。

次の手記はひとりの老婦人のそうした心を、任運荘の寮母が描いたものである。

——Aさん(八九)はこの村に後妻として嫁ぎ一男を儲けた。七十歳で夫に死別。先妻の子である

長男も死亡。Aさんは老後を嫁に託し、孫夫婦と共に暮らしていた。妻子は家を出て北九州で生業を営んでいる。

五十年、家庭介護ができなくなったという理由で入所してきた。仏壇を祭り、朝夕のお詣りを欠かさない。一応身の回りのことは自分でできるが、部屋にこもりきり。

ある夜半、彼女は心臓の発作を起こした。この日から、口ぐせのように「帰りたい」というようになり、二、三カ月間は無理に食べさせなければならぬほど衰弱してしまった。家のことは頭から離れず、「帰りたい」「増築したわが家を一目見たい」と、荷物をまとめ寮母室に訴えに来る日が続いた。涙を浮べて哀願する彼女に私たちは居たたまれず、家族に幾度も連絡する。

しかし、歩いて十分もない近くの家族の返事は極めて曖昧で連れ帰ろうとしない。盆正月の帰省運動の呼びかけにも応じない。丸一年たつてようやく、Aさんにとって初めての帰省が実現した。

孫に負ぶわれて帰っていくAさんの、丸い小さな背中を見送りながら、祈らずにはおられなかった。「よい帰省でありますように……」。

帰省予定日の朝、家族に付き添われて帰省したAさんの顔色は冴えなかった。「おばあさんがどうしても決めた日に帰らんなんというもんですから」といいわけする嫁。「今日は盆踊りや小松明せうめい(こだい)があって、うちからとてん美しゅう見ゆるき、楽しみにしちよったに」と独り言のAさん。そそくさと帰って行った家族たち。嫁は民生委員でもある。

しかし、そんな帰省でも彼女にプラスに働いたようで、精神的に安定したAさんは、おむつたた

みや朝の勤行などのリハビリにも参加するようになった。Aさんの部屋にSさんが入居してきた。めったに笑うこともないうつろな眼をした人である。老人の共通の寂しさを感じたのか、Aさんはそれから何くれと力づけ、世話をやくようになった。Sさんがおふろに行けば着替えを持って行き、「私のリンゴをすってあげちよくれ」と寮母室に来るのだった。Sさんの世話をやくことに生きがいを見出していたようである。

しかし、病気は徐々に身体を蝕んでいった。五十二年秋、医師は首をかしげてつぶやいた。「ふしぎだ。もう心臓はめっちゃめっちゃなのに……」。命の灯を燃やし続けた。音もなく戸を開けて、廊下に行く小さな姿。

視力も弱ってしまったので、トイレの横の部屋に移ることになった。たまたま嫁が来会わせて、部屋替えを手伝ったことを、仏様のおひきあわせと喜び、Aさんは手を合わせるのだった。

それから二日たった。夜勤者が朝のおしぼりを持って行くと、床に寝たまま手を伸して受取り、続いてホーサン水を浸した脱脂綿で両眼を拭いた。いつもと変らないAさんだった。そのすぐ後に隣のMさんの知らせて駆けつけると、一人で起きようとしてふらついたAさんが、ベッドに伏したままだった。

〔にんうん荘〕18号・53・4

ここに流れる哀歎はホームに住む人たちすべてのものであろう。非情な嫁に対してさえ老婆は仏のお引き合わせと喜んでいる。老親は何よりも家族を本当に頼りとしている。それが見抜けないと

私たちが老人を「施設老人」にしたてあげる過ちを犯すことになろう。

「老人ホームにおける老人と家族に関する調査」(53・12・全社協)で、家族のある老人は特養と軽費ホームでは八五%もいるのである。福祉事務所を中心にして、ホーム側と家族とが、老人の幸せの本当のあり方を求めて、協力する態勢が確立されていかねばならない。

「帰省運動」も、老人の帰郷の念を和らげるだけが目的ではなく、家族が老人を受け入れることにも役立つものでなければならぬ。

家庭に復帰できた例を見ることほど楽しいものはない。

Yさんは入居時から心のはりをなくしていた。身障の妻を家にひとり残したままだったから。その妻にはホームヘルパーが派遣されていた。そして、生活保護を受けている。ホームのすすめにも「家に帰りたいが、役場の人からここに入れられたので、早く出ると悪いから」と言葉を濁して、応じなかった。一年後、ようやく裏の町営住宅に移ったが、買物でホームの前を通ると、窓から振る寮母の手に、今も変らず杖をあげて応えてくれる。

この八月に退所した羽田野さんの場合は、ホームを退出する間際まで心は揺れ動いた。羽田野さんは病院から一直線に任運荘に移されてきたので、望郷の心はひと倍強かったが、ホーム生活にすっかり安定してしまい四カ年がたった。強いすすめで、ついに家族は決心し、「男手一つで育ててくれた父をホームに預け放しで、本当は心で責められていた」と、引き取っていった。

送別会の時、「こんなよい思い出のホームに、二度と来れんと思うと胸がつまって……」と泣きじゃくる。「私が出れば、一人の老人が助かるので」と、復帰の意義を自分に言い聞かすように挨拶を続ける。

こうして、久しぶりの羽田野さんの家庭復帰はホームに安住しきった老人たちの心を、少し引き締めている。「わしも永こうここにはおらんで。家のもんが迎えにくるきな」という。そのあてがないのに、そういい始めていることに、私たちは意味があることを感じる。

注1 小松明(こだい)は江戸時代から伝えられている町内の一大行事で、処刑された百姓一揆の首謀者を供養するためとか、豊作を祈願する虫送りのためともいわれている。一万本の幻想の光りが闇の緒方盆地に輝くのは、夏の風物詩となっている。